セネカの悲劇『テュエステス』のpietasについて

宮城徳也

本稿は哲学者セネカの悲劇『テュエステス』（以下Thy.）に頻出するpietas という語に注目し，作品におけるその意義と重要性を指摘することを意図するものである．

I

アルゴスの王アトレウスは，かねて不和の弟テュエステスを，偽りの和解によって欺き，その子らを惨殺して父親の食卓に供し，彼を不幸のどん底に突き落とす．古来から伝えられ[1]，現存はしないが，翻案の原型[2]となったと考えられる先人の作品を生んだこの物語の展開に，セネカは多くの独創を施したと思われる．作品としての水準に問題があるとしても，後世に与えた影響[3]を考えても，この作品の構成に施された工夫や修辞技法，また一つ一つの語に込められた多様な意味を考察することは意味の無いことではない．

Thy.が統一の工夫を巧みに施された作品であることは様々な角度から論ずることができる[4]．

非道の家の家祖タンタルスの亡霊と復讐の女神フリアによって語られるプロロゴスにおいて，全体の枠組みが語られ，劇はその通りに展開する．タンタルスは自己の蒙る劫罰に言及しつつ，子孫が展開する新たな罪と悲劇への不安を語る．彼に対しフリアは「非道の家を狂気へと導け」(penates impios furiis age)(24)と命じて，子孫の悲劇の導き手となることを促しながら，アトレウス，テュエステス兄弟の不和と運の変転(32-39)，また後のアガメムノンの悲劇(42-46)にも触れ，「トラキアの罪」(Thracium nefas)[5](56)という語を用いて，この劇で展開される，子供を殺して父親に食べさせるという忌まわしい行為を予告する(56-63)．

タンタルスの亡霊はそれを拒むが，結局は屈服し(100)，このことも後にテュエステスが子の慫慂に屈して(489)[6]，アトレウスの罠にはまることに対応している．フリアによって言及される天界の異常(48-51)，太陽神の逡巡(120-121)も，使者の報告(776-788)，第四合唱隊歌(789-884)に対応[7]して，背景を成す伝承[8]を踏まえ，作品に統一を与えている．

タンタルスの亡霊は多くの点で，この劇におけるテュエステスを想起させるが，プロロゴス(4-6，68-69)，第一合唱隊歌(149-179)で言及されるタンタルスの飢えと渇きも，後にテュエステスによっておぞましい形で満たされることになる(909-919)．

このように，作品Thy.の「統一」に関しては，様々な角度から検討することが可能であるが，本稿では頻出する語pietasに焦点をあて，この作品に統一性を与える主題としてのpietasの重要性を考える．

II

pietasという語は極めてローマ的概念であり，その意味で，セネカの悲劇がギリシア悲劇の翻案でありながら，ローマ的独自性を持つことの一つの証でもある[9]，ということもできる．宗教性を背景とした人倫，道義を第一義とするこの概念は，セネカの全作品において，大きく三つの意味に分類することができる．すなわち，「敬神」，「肉親の情義」及び漠然と，諸徳の一つという大体三つの側面をもっていると考えられる[10]．

散文作品を含めたセネカの全作品において登場するpietasという語を，前後の文脈から検討すると，圧倒的に多いのは「肉親の情義」という側面であることがわかる[11]．

特に，悲劇においてその傾向は顕著である．『狂えるヘルクレス』においては，ヘルクレスに戻るべき家族への愛，父アンピトリュオンに求められた同情の親心[12]．『トロイアの女達』においては，引き渡しを求めるウリクセスの脅迫の中に現れるアンドロマケのアステュアナクスへの母性愛[13]．『フェニキアの女達』においては，テーバイ王家の悲劇をめぐる家族間の情義[14]．『メデア』では，子らをめぐって葛藤するイアソンの父性愛[15]と

メデアの母性愛[16]．『パエドラ』では、ヒッポリュトゥスの異母弟への愛情[17]と，テセウスの悲嘆の中に現れる，家族のなかで守られるべき愛と秩序[18]．『オエディプス』においては，逆説や思い込みを含んだ父母への孝心[19]．『アガメムノン』では、クリュタエメストラが娘エレクトラに要求する，母に対して守るべき子の道[20]．偽作の可能性の有る『オエタ山上のヘルクレス』においても，父母に対する孝心の意味で用いられている[21]．

このように悲劇においては殆どの場合，pietasは祖先，父母への孝心，弟妹，子女への情愛という肉親の情義の意味で用いられている．

例外は極少数で，例えば『アガメムノン』では，列挙される諸徳の一つとしてpietasが登場する[22]が，このような列挙の仕方は後に触れるように，Thy.にも現れ，散文作品の中にも幾つかの例が見られる[23]ので，一種の決まった表現のように思われる．この場合でも，肉親の情義という側面が否定されるわけではない．

散文作品においても，何らかの意味で，肉親の情義を指して用いられる場合が多いが，セネカの作品において，はっきりと「敬神」を意味する例が無いわけではない．若い友人ルキリウスにあてられた『書簡集』[24]76番の中に，「良き人は神々に対するこの上ない敬神の念を持たねばならぬ，というのは君も認めるだろう」(Virum bonum concedas necesse est summae pietatis erga deos esse)(76.23)，とあり，当然セネカにおいてもpietasという語の背景に宗教性が意識されていることがうかがわれるが，このことは後にThy.におけるpietasを論ずる際に重要な意味を持つ．

Ⅲ

ここで、Thy.においてpietasの語が現れる箇所を文脈に即して考えていくが，その際，散文作品『怒りについて』(De Ira，以下 Ira)の中の一エピソードを念頭に置くこととする．Thy.において，アトレウスの猛り狂う姿の背景にIraで語られている「怒り」があることは既に指摘されており[25]，当然そのことも意識しなければならないが，ここで注目したいのは，第二巻の次の箇所である．「もし彼が自分のために恐れていたのなら，ローマ人たる

その父親を私は蔑んだことだろうが，実はその時，肉親の情義が彼の怒りを抑えたのだ．」(Contempsissem Romanum patrem,si sibi timuisset : nunc iram compescuit pietas.)(Ⅱ.33.6)[26]

ここで紹介されているエピソードは，暴君カリグラによって息子を殺された或る貴族が，処刑の日暴君の招きに応じ，泰然として宴席に列したのは，もう一人の息子を思う親心の故である，というもので，そこから「それ故，怒りは抑えるべきなのだ」(Ergo ira abstinendum est)(Ⅱ.34.1)という教訓を引き出している．そこには，「彼は哀れにも耐えたが，その様はまるで息子の血を飲んでいるかのようだった」（ perdurauit miser, non aliter quam si fili sanguinem biberet)(Ⅱ.33.4)とあって，Thy.のおぞましい悲劇を想起させる．

だが，このエピソードが語っているのは，真のpietasはiraに勝つ，ということであり，その点では一見してThy.が描く世界とは異なっているかのようである．しかし，この相違は，実は一つの教訓の正負の両面であると言えないだろうか．このことを念頭に，以下で，Thy.に現れる個々のpietasを考察する．

Ⅳ

SAT.Vbi non est pudor
nec cura iuris sanctitas pietas fides
instabile regnum est. AT.Sanctitas pietas fides
priuata bona sunt; qua iuuat reges eant.

（［従者］羞恥も，遵法も，清廉も，人倫も，信義も無い所では，王権は危ういものです．［アトレウス］清廉も，人倫も，信義も平民の善行にすぎない．王者には好きなようにさせよ．）(215-218)

ここに，仮に人倫と訳したが，諸徳の一つとして初めてpietasが登場する．弟に対して残忍な復讐を企む自分に対し，王者の正道を説く従者に反論しながら，アトレウスは自己への諸徳による抑制を排し，悪業の断行を宣する．

ここではまだpietasは肉親の情義のみに特定することはできない．

しかし，従者との対話を通じて，pietasの意味が限定されてくる．

SAT.nulla te pietas mouet?

AT.Excede,Pietas,si modo in nostra domo

umquam fuisti.

（［従者］肉親の情義があなたを動かすことはないのですか．［アトレウス］「肉親の情義」よ，一度でも我が家に居たことがあるのなら，立ち去るが良い．）(248-250)

ここでは，まだ肉親の情義に限定しないことも可能であるが，アトレウスの「我が家に一度でも居たことがあるなら」という台詞によって，息子を神々の食卓に供した家祖タンタルス，ヒッポダミアをその父を騙し討ちにして妻にしたペロプス，ペロプスが他の女に産ませた異母弟クリュシップスを母に唆されて殺したアトレウス，テュエステス兄弟，兄アトレウスの妻アエロパと通じ，その王権を簒奪したテュエステスという一連の人物を想い起こすとやはり，pietasは一族の守るべき孝心や情愛と解すべきではなかろうか．

こうして，一般的美徳から肉親の情義へと焦点を絞られていくpietasが次に現れるのは，兄の，和解して王権を分有しようという招きに心揺れるテュエステスに，曾祖父と同名の息子タンタルスが説得しようとする場面においてである．

Redire pietas unde summota est solet,

reparatque uires iustus amissas amor.

（肉親の情義は逐われた所へと戻るものですし，正しい愛は失われた力を取り戻すものです．）(474-475)

アトレウスの企みを恐れるテュエステスにタンタルスは，pietasの復活を説き，それを「正しい愛」(iustus amor)と言い換えており,それに対し父が「兄がこの私を愛するだって」(Amat Thyesten frater?)(476)と反論するこ

とから察しても，ここでのpietasは兄弟愛であると考えて良いであろう．更にテュエテスは不可能事(adynata)を列挙して，アトレウスへの不信をあらわにするが，彼自身の心の弱さによって，誘惑に屈する．

優柔な弟に対し，憤怒と狂乱に支えられた兄の姿勢は一貫している．弟一家が罠にはまった喜びと復讐への思いを隠して，テュエステスを迎える．

Fratrem iuuat uidere.complexus mihi
redde expetitos.quidquid irarum fuit
transierit; ex hoc sanguis ac pietas die
colantur,animis odia damnata excidant.

（弟に会えて嬉しい．さあ，待ちに待った抱擁を返してくれ．嘗てあったどんな怒りも消え去るが良い．今日という日から，血縁と肉親の情義が尊重され，呪わしい憎悪は我らの心から去るが良い．）(508-511)

この箇所に込められた二重の意味と皮肉に関しては，後に論ずるが，ここでpietasが少なくとも表面上は「肉親の情義」を意味すると考えて間違いはなかろう．

この見せかけのpietasを受けて，テュエステスは答える．

Diluere possem cuncta,nisi talis fores,
sed fateor,Atreu,fateor,admisi omnia
quae credisti.pessimam causam meam
hodierna pietas fecit.est prorsus nocens
quicumque uisus tam bono fratri est nocens.

（あなたがそのようでなければ，私は自分のしたことをすべて帳消しにできるのに．だが，私は告白いたします．兄アトレウスよ，あなたが私がしたとお思いの全ての罪を犯したことを，私は告白いたします．今日あなたがお示しになった肉親の情義が私の立場を最低のものといたしました．これほど善良な兄に対して罪有ると思われる者は，まことに罪有る者でございます．）(512-516)

こうしてテュエステスは，まさにpietasをめぐって罠にはまることになった．作品の前半の要ともいうべきこの箇所で，アトレウスとテュエステスの双方から，pietasという語が発せられているのは大いに注目されて良いであろう．

この呪われた兄弟の見せかけの和解を受けて，第三合唱隊歌の前半はpietasへの賛歌となっている．

nulla uis maior pietate uera est:
（いかなる力も真の肉親の情義に勝るものはない．）(549)

合唱隊はpietasを「真の愛」(amor uerus)(551)と言い換えており，ここでもpietasは肉親の情義という側面を前に出していると考えて良いだろう．更に合唱隊は，

opprimit ferrum manibusque iunctis
ducit ad pacem Pietas negantes.
（剣を抑え，拒む者達を，手を結び合わせて，平和へと導く方こそ女神ピエタスである．）(551-552)

と歌いつぐが，この二つのpietasの間に「怒り」(ira)という語が配置され，ここでは，おそらく作者の思想としての，真のpietasはiraに打ち勝つ，という教訓が語られている．

V

ここで先に触れたIraの挿話を想い起こし，iraとの相克を念頭に，pietasの二重の意味とそこに込められたアイロニーを考えてみる．

以後展開される惨劇の原動力が「怒り」であることは，すでにフリア(26, 39)と従者(259)によって語られているが，テュエステスの子タンタルスは父を説得する際に，アトレウスが「怒りを捨てた」(431)と語っている．しか

しアトレウス自身は，

cum sperat ira sanguinem,nescit tegi —
tamen tegatur.
(怒りが血を欲するとき，抑えることはできない．だが，抑えよう．)
(504-505)

と語っており，和解の装いとは裏腹に，自らの憤怒が流血を望んでいるが，肉親の情義故ではなく，当初の目的である惨劇を完遂するために，かろうじてこらえている，と述べている．

504行の傍白に語られる「血」(sanguis)を欲する「怒り」(ira)という語の残響が耳に有れば，先に引用した，「嘗てあったどんな怒りも」(quidquid irarum fuit)去った後に尊重されるべき,510行目のsanguis ac pietasが，何と皮肉に，不気味に聞こえてくることであろうか．既に指摘されている[27]が，colanturも宗教的響きを持った語である以上，ここに神々に犠牲を捧げる儀式に模して，後に遂行される惨劇を読み取ることは決して唐突ではない．現にこの場面の最後で，アトレウスは，

ego destinatas uictimas superis dabo.
(私は天の神々に定められた犠牲を捧げよう．) (549)

と述べており，ここで全ての読者ないし観客の中で，犠牲がテュエステスの子らであることを察知しない者はないだろう．

第三合唱隊歌が半信半疑で兄弟の和解に触れ，pietasを讃えながら，王座の不安と運の変転を歌い上げた後に，アトレウスの甥殺しに関する使者の報告が有るが，そこでは神々に犠牲を捧げる儀式の作法通りであることが強調されている(682-695)．ここに，510行目のsanguis ac pietasに込められたアイロニーを読み取ることができる．pietasの背景にある宗教性を逆手にとって，不気味な効果を上げている．

pietasに込められた皮肉は次の一句の中にも読み取れる．

Primus locus (ne desse pietatem putes)
auo dicatur: Tantalus prima hostia est.
(肉親の情義に欠けているとお思い有るな．一番目は祖父に敬意を表し，タンタルスが最初の生け贄となったのです．) (717-718)

アトレウスが自分の祖父と同名の甥を最初に屠ったことを，使者はpietasと呼んでおり，pietasに背く行為が父祖の例に倣うことになるというpietasのアイロニーは前半部にも見られる[28]が，ここにもpietasの持つ多義性を逆手に取った皮肉な効果が出ている．

使者は，虐殺の様子を二つの比喩を用いて語るが，アトレウスをガンジスの森の空腹な牝虎に喩えた後に，

sic dirus Atreus capita deuota impiae
speculatur irae.
(そのように，恐ろしいアトレウスは非道な怒りに犠牲として捧げられた者らをじっと見つめる．) (712-713)

と述べ，また，アルメニアの獰猛な獅子に喩えてから，

non aliter Atreus saeuit atque ira tumet,
(まさにそのように，アトレウスは猛り狂い，怒りに奮い立つ)

と語っている．ここに見られる慎重に選択された語の配置から，前者においては，犠牲を捧げられる神と同一視される[29]「怒り」を，後者においては「怒り」と一体化し，その化身となったアトレウスの姿を描いているように思われる．犠牲を捧げられる神はpietasの対象であるのに，神と同一視されているかに見える「怒り」には，pietasをないがしろにするという，impiusという形容句が付されているのも皮肉な効果を高めている．

前半部にも，後半部にも，神々をないがしろにし，自己を神と同一視する

アトレウスの姿勢が見られ[30]，「肉親の情義」と「敬神」の二重の意味を持つpietasを踏み躙る彼の生き様が作品全体にいかんなく描かれている．しかも，その両方の意味に対して，祖先の手本に倣い，儀式の作法を遵守するというアイロニーが付加されている．

こうして見てくると，pietasという語がこの作品において極めて重要な役割を果たしていることは否定できないだろう．しかもその配置やそこに込められた二義性のアイロニーを考えると，作者がpietasをこの作品の主題の役割を果たすものと考えていたことは想像にかたくない．

VI

718行の使者の台詞を最後に，pietasという語は，この作品に現れなくなるが，pietasの多義性，特に「敬神」と「肉親の情義」の二義性などを踏まえたアイロニーは，pietasという語が現れない後半部にも幾つか見られる．

at ille fibras tractet ac fata inspicit
et adhuc calentes uiscerum uenas notat.
（一方，彼は臓物を引き出し，運命を見定め，内臓のまだ熱い血管を読み取る．）(757-758)

使者の報告の中で，アトレウスは自ら殺した肉親の内臓で，神々に伺いを立てる臓物占い[31]をしている．ここに，犠牲を捧げる作法通りに甥を惨殺したのと同趣旨の効果が読み取れる[32]．

清貧に甘んずる賢者の見せかけをかなぐり捨て，つかのまの贅沢に酔い痴れて，愚者の正体を露顕しつつも，言い知れぬ不安に苛まれるテュエステスが，息子達との同席を求めると，アトレウスは，

totumque turba iam sua implebo patrem.
（私はすぐにも，父親を身内の者で満たしてやろう．）(979)

と応ずる[33]が，ここでは，テュエステスがそのように理解するであろう，「父の回りに子らを集めてやり，父の気持ちを満たしてやる」という意味の裏に，当然，「お前の腹を息子達の肉で満たしてやる」というおぞましい意図が隠されており，表面の肉親の情義を尊重する姿勢の裏に，肉親の情義を踏み躙る恐ろしい行為が見え隠れしている．

思わせぶりな態度を見せながら，アトレウスは，テュエステスに父祖伝来の杯を勧める．テュエステスは，兄の杯を受け，ワインを父祖の神々に献じてから飲み干すが，それには子らの血が混じっていた[34]のか，我が身に異常が生じ，天変地異が起こる．このこともまた，pietasのアイロニーと言えるが，その際テュエステスは，

quidquid est,fratri precor
natisque parcat,omnis in uile hoc caput
abeat procella.
（それが何であれ，兄とわが子らを避けて，嵐は全てわが卑しき頭へと来るよう，私は祈る．）(995-997)

と，わが身を捨てても，兄弟や息子達の無事を祈願して見せる．

一見，pietasに基づいているかに見えるこの行為は，全てを知っている読者や観客には，悲惨であると同時に，滑稽であるとすら思える．何故なら，彼は，自分を陥れた兄と，自ら食らってしまった息子達のために，それとは知らずに，祈っているからである．二重に滑稽であるのは，兄の妻と通じ，兄の王位を奪って，「肉親の情義」を踏み躙り，既に起こってしまっている悲劇の原因である彼が，実体の無い「肉親の情義」を示すからである．

このことを視点を変えて考えてみる．

Ⅶ

第二合唱隊歌は，真の王者の在り方を論じつつ，自らはつつましい平安を望んで，次のように結んでいる．

illi mors grauis incubat
qui,notus nimis omnibus,
ignotus moritur sibi.
(全ての者に余りにも知られながら，己れを知らずして死する者には，死が重くのしかかる．) (401-403)

「隠れて生きよ」（λάθε βιώσας）という教訓の変形とも言えるこの詩句は，「己れを知らぬ者の悲劇」という，この作品の中心的テーマを要約して提示している[35]と考えられないだろうか．

富と王権の不安，つつましい生活の平安，運の変転という一連のテーマはセネカの悲劇に頻出する[36]がThy.でも合唱隊の一貫した思想である[37]．この作品においては，テュエステス自身も，一旦は合唱隊と同じ考えを表明している[38]．この時，テュエステスは哲人のように思われ，賢者の装いを呈していた．

しかし，それは見せかけだけで，実は意志薄弱で，一時の権勢と富に溺れて，偽りの栄耀に酔う愚者にすぎなかったことを自ら露呈する[39]．そして実は，そのことをアトレウスは見通していた[40]．

この作品において，アトレウスは悪の権化であり，当然pietasの視点からは負の評価を下される人物であるが，彼はそのことを自覚しており，自らを知るとともに，仇敵たる弟の性格をも熟知していた．これは，富と権力を一時は手にし，貧窮と放浪の生活をも味わって，賢者の思想を身につけたかに見え，本人もそのように思っていたテュエステスが，真の自分を知らず，また，口にしてはいながら結局はアトレウスの性質を見抜くことができず，罠にはまってしまうのと対照的である．その意味で，この作品はやはり，テュエステスの側からは，「己れを知らぬ者の悲劇」であると言えよう[41]．

このことはpietasのアイロニーという視点から補強することができる．先に触れた，兄や子供達のために祈るテュエステスの姿は，まさにそうであるが，それだけではない．先に述べたように，pietasのアイロニーは，pietasという語の現れない後半部にも散見するが，その最大のものは，この作品の

最後の場面に見られる．惨劇の真相を知り，悲嘆に暮れて狂乱するテュエステスがアトレウスを呪い，アトレウスがそれに応酬する．その一連のやりとりの中に，

TH. Piorum praesides testor deos.
AT. Quid? coniugales?
（［テュエステス］行い正しき者らの守護者たる神々を私は証人とする．［アトレウス］なんだって．それは結婚の神々をか．）(1102-1103)

とあるが，行い正しい，すなわち神を敬い，肉親の情義を重んずる者達を守る神々にテュエステスは訴えるが，彼が兄である自分の妻と密通したことを念頭にアトレウスは，その神々というのは結婚を司る神々のことか，と応じて，pietasを踏み躙っていながら，自らをpiusな者達の側に置くテュエステスを皮肉っている．ここにも「己れを知らぬ」テュエステス像が浮彫りにされる．

作品Thy.は次の応酬を以て，幕を閉じる．

TH. Vindices aderunt dei;
his puniendum uota te tradunt mea.
AT.Te puniendum liberis trado tuis.
（［テュエステス］復讐の神々がおいでくださるだろう．神々にお前を，罰せられるようにと，わが誓願が引き渡す．［アトレウス］お前を，罰せられるようにと，私はお前の子供達に引き渡す．）(1111-1112)

「お前を，罰せられるようにと」を反復し,人称を変えて「引き渡す」(tradere)を重複して用い，完全ではないが，黄金詩行[42]を想わせる台詞で劇を終える技巧の見事さとともに，ここではテュエステスが、「神々」と「誓願」に言及することによって，pietasの「敬神」の側面を想起させて，アトレウスを，暗に「神をも恐れぬ輩」であると語って，呪っているのに対し，アトレウスは，pietasの「肉親の情義」の側面から，自分の子供を食らった

テュエステスこそ，非道の輩である，とする，この作品における最大にして最も効果的な，pietasのアイロニーを読み取ることはできないだろうか．ここでも，アトレウスに完全に論駁されたテュエステスは，「己れを知らぬ」者の惨めな姿をさらけ出している．

他作品においても見られるように，Ira.の挿話などの類推からセネカ自身の思想を反映していると思われる合唱隊の「真のpietasはiraに勝る」という理念に反する世界を，アトレウスとテュエステスは生きているが，彼らは理念の反証ではなく，そのおぞましい悲劇的結末によって，pietasに反して生きる者，見せかけの賢者を装う者，理不尽なまでのiraの力を心の内面においても，外的状況においても，克服できずに，それに屈する者達の典型として，血縁者間の憎悪が果てしない流血を呼ぶという悲劇(43)を展開している．それを際立たせているのが，随所に効果的に配置されたpietasのアイロニーであると言えよう．

そればかりではなく，pietasのアイロニーは，やはり合唱隊の思想から導かれるこの作品のテーマ，「己れを知らぬ者の悲劇」を見事に補完しているように思われるのは，上に見た通りである．

以上の考察から，頻出するpietasという語，及びそれが表す概念が，それ自体が主題の一つであるとともに，多義性から生ずる巧みなアイロニーによって，この作品の中心的テーマとも言うべき「己れを知らぬ者の悲劇」を際立たせるなど，様々な役割を果たして，その語が現れる所でも，現れない所でも大きな存在感を持って，この作品全体に統一を与える，極めて重要な意味を持ったキーワードである、ということが言えよう．

註

(1) Apollodorus,Epitome,Ⅱ.10-14. Hyginus,Fabulae,LXXXⅥ-LXXXⅧ.

(2) A.Lesky,Die griechischen Pelopidendramen und Senecas Thyestes,

Wiener Studien 43(1922/3),172-198, W.M.CalderⅢ,Secreti Loquimur:An Interpretatin of Seneca's Thyestes,in A.J.Boyle,ed.,Seneca Tragicus, Ramus Essays on Senecan Drama,Berwick [Australia] ,1983,184-188.ソポクレスとエウリピデスの『テュエステス』があったことが伝えられているがレスキは後者，コールダーは前者を原型と考える．

(3) J.Daalder,ed.,Thyestes, Lucius Annaeus Seneca, translated by Jasper Heywood (1560), London, 1982, xix-xxxviii.

(4) R.J.Tarrant,ed.,Seneca's Thyestes,Atlanta,1985,45-48. A.J. Boyle, Hic Epulis Locus : The Tragic World of Seneca's Agamenon and Thyestes,in Seneca Tragicus,209-213.

(5) Ouidius,Metamorphoses,6.620-674.

(6) 「私は従う」(sequor)とタンタルスの亡霊と同じ語を用いているばかりでなく,必ずしも幸福ではない現状に戻ろうとする姿勢も相似している．

(7) アトレウスも言及している．891-892.

(8) アポロドロスによれば，太陽の逆行は兄弟の王権争いの中で，アトレウス復位の条件として現れるが，ヒュギヌスはアトレウスの蛮行故の現象としている．Apollodorus,Epitome,Ⅱ.12. Hyginus,LXXXⅧ.2. J.G.Frazer, ed.,Apollodorus Ⅱ,Cambridge,Mass.and London,1921,164-167.

(9) P.Grimal,ed.,Sénèque,Phaedra(Phèdre),Paris,1965,132.

(10) ①「敬神」Epistulae (以下 Ep.) ,76.23.②「肉親の情義」Ira,66. 37,De Beneficiis(以下Ben.),Ⅱ.11.5,Ⅲ.33.3,Ⅲ.36.1,Ⅲ.37.1,Ⅵ.23.5, Ⅵ.36.1, De Consolatione ad Heluiam (以下 Hel.) ,2.4,4.2,16.1,16.7, 18.2,18.3,18.7, De Consolatione ad Marciam,1.2(bis),4.2, De Consolatione ad Polybium (以下 Pol.) ,3.2,5.3,5.4,9.1,10.1.③「諸徳の一つ」Ira,Ⅱ.28.2, Ep.,49.12,74.12,81.16,86.1,90.3,92.19, Ben.,Ⅱ.31.1, Hel.,9.3, De Tranquilitate Animi,3.4.

(11) 散文作品の中でも，「両親への敬意」(Ben.,Ⅲ.36.1)，「父への孝養」(Ben.,Ⅵ.36.1)，「母への孝心」(Hel.,18.2),「継母への孝心」(Hel., 2.4)，「父の愛」(Ira,Ⅱ.33.6)，「母の愛」(Hel.,4.2)，「祖母の孫への愛」(Hel.,18.7)，「兄弟愛」(Pol.,3.2)，と幾つかの例を拾ってみても，

「肉親の情義」の多様な側面が見られる．(10)を参照せよ．

(12) Hercules Furens,1269．もう一箇所(1094)は「肉親の情義」とは限定しにくいが，『狂えるヘルクレス』のpietasの意味に関しては，別の機会に論ずる．

(13) Troades,581.

(14) Phoenissae,97,261,310,455,536.

(15) Medea,438,545.

(16) Ibid.,943,944(bis).

(17) Phaedra,631.

(18) Ibid.,903.

(19) Oedipus,19,796.

(20) Agamemnon,957.

(21) Hercules Oetaeus,984,986,1027. Tarrant,9.

(22) Agamemnon,112.

(23) Quam multa pietas humanitas libertas iustitia fides exiguunt, quae omnia extra publicas tabulas sunt (Ira,Ⅱ.28.2).他に10例が見られる．(10)を参照せよ．

(24) テクストは，L.D.Reynolds, ed.,L. Annaei Senecae ad Lucilium Epistulae Morales,Oxford,1965.

(25) Tarrant,91. J.P.Poe,An Analysis of Seneca's Thyestes,TAPA 100 (1969),361,370.

(26) テクストは,L.D.Reynolds,ed.,L.Annaei Senecae Dialogorum Libri Duodecim,Oxford,1977.

(27) Tarrant,164.

(28) 242-243.

(29) Tarrant,193.

(30) 264-266,885-886,911.

(31) 臓物占いは『オエディプス』(297-402)にも現れる．

(32) Cf.,1058-1059.

(33) Cf.,890-891,1021-1023.

(34) poculum gentile (982-983) は「父祖伝来の家宝の杯」という意味の他に，「お前の子の血の混じったワイン」という裏の意味が読み取れる．Tarrant,227.

(35) 『狂えるヘルクレス』(201)，『オエディプス』(992-994)にも見られる．

(36) Phaedra,1124-1140, Herucules Furens,192-201, Oedipus,882-910, Agamemnon,57-107.

(37) 391-403,596-622.

(38) 446-470.

(39) 920-937. 特に，「古きテュエステスを心から追い払え」(ueterem ex animo mitte Thyesten)(937)は彼の変心を総括している．

(40) 289-294,295,302-304,306-307.

(41) この作品をアトレウスの狂気に焦点をあてて見ることも可能であろうが，悲劇としてはあくまでもテュエステスを主人公と考えるほうが素直であろう．Cf.,Poe,364.

(42) Tarrant,88. Cf.,L.P.Wilkinson,Golden Latin Artistry,Cambridge, 1963,215-217.

(43) 一見勝利者であるかのように見えるアトレウスの悲惨な末路とその子孫達の悲劇は良く知れており，既に指摘されているように，カリグラへの類推が念頭にあれば，一層のことであろう．Cf.,Tarrant,4.

［付記］セネカの悲劇のテクストは，O.Zwierlein,ed.,L.Annaei Senecae Tragoediae,Oxford,1986 を用いた．